

－ 6. 平成 20 年度気候講演会（札幌管区气象台との共同開催）－

気候講演会雑感

札幌管区气象台 佐藤 秀樹

6月21日（土）、札幌市のかでる2・7で「平成20年度気候講演会 ～ストップ・ザ・地球温暖化 in 北海道～」を開催した。

7月に北海道洞爺湖サミットが開催されることから温暖化防止に関する意識の啓発を目的に、札幌管区气象台と共同開催による気候講演会を計画することとした。開催時期は洞爺湖サミットが行われる前の6月21日（土）として準備が始まった。

環境月間の6月はまさに環境に関する行事が目白押しで、6月19日（金）～21日（土）には札幌ドームで様々な展示や講演などがある「環境総合展2008」が開催されており、学会支部・管区气象台ともに一丸となって講演会の広報・動員活動を行った。

13時、気象予報士でお天気キャスターの大久保智子さん（気象協会北海道支社）による司会で気候講演会が始まり、岡野札幌管区气象台長（気象学会北海道支部長）による開演挨拶につづき、オホーツク海の流氷がなくなるかもしれないと警鐘を鳴らす流氷科学センター所長の青田さん、大気大循環から見た地球温暖化の様子については地球環境フロンティア研究センターの野田さん、地域生活に根ざした温暖化防止を訴える温暖化防止活動推進員の岡崎さん、と様々な立場から講演を頂いた。講演に当たっては講師から事前に講演の概要をいただき、また読み物となる資料と併せて予稿集として来場者に配布した。

内容的にむづかしい話にもなりがちだが、講師には写真や図を多く使った資料を作って頂き分かりやすい講演をしていただいたと思う。この講演会が一時のサミット関連行事にとどまらず、市民の意識にずっと根付いてくれることを願う。

【講演内容】

(1) 「流氷は高感度の温度センサー」 オホーツク流氷科学センター所長 青田 昌秋 氏

その昔、流氷は厄介者扱いをされていたが、流氷が海の生き物の食物連鎖の土台である植物プランクトンを育て・運びまた観光に貢献し、近年では浜の福の神と言われるようになった。流氷は青い海のフタとなって海からの大気への熱の流れを抑えている。また、流氷の成長過程で吐き出される塩水は、海中深く沈んで深層水となり世界を巡って大量の熱を輸送し、大気や海洋を循環させ、地球環境に大きな影響を及ぼしている。50年後、オホーツク海の気温が4度上昇すると、オホーツク沿岸では流氷が生まれなくなってしまうかもしれない。

(2) 「地球温暖化の地域的な違いを生じるメカニズム」

独立行政法人海洋研究開発機構 地球環境フロンティア研究センター

地球環境モデリング研究プログラムディレクター 野田 彰 氏

(元気象研究所 気候研究部長)

2007年のIPCC第4次評価報告書の気候モデル予測結果について、メカニズムに重点を置いて紹介された。温室効果ガスの増加により地表面温度が上昇するが、海陸分布や気候システムの相互作用があるため一様に温暖化するわけではない。高緯度では雪や氷の減少により土壌は太陽放射を吸収し、海洋では大気への熱の伝わりが温暖化を加速する。低緯度では、温室効果で地上気温が上昇すると対流活動により対流圏の上下混合が起こり、大気大循環を通して地球温暖化の変化の主要な空間パターンを形成すると予想される。その他、偏西風ジェットの変動や海陸の温暖化変化の違いが及ぼす影響が大きいと、今後の詳細なメカニズムの解明が課題となる。

- (3)「温暖化防止」～私たちにできること 北海道地球温暖化防止活動推進員 岡崎 朱実 氏
京都議定書による温室効果ガス削減のための第1約束期間が4月から始まった。6%の削減で温暖化が止まるわけではなく、まだ始めの一步に過ぎない。私たち自身が普段の生活で無駄を減らし適度な室温設定や衣服の工夫など、エネルギーの節約は大切である。省エネは、光熱費や暖房費の節約にもなり、家計にもプラスとなる。家電製品の待機電力の削減など、家庭から市民から連携を広めることが大切である。



かでのホール (札幌市かでの2・7)



青田 昌秋 氏



岡崎 朱実 氏



野田 彰 氏